

過去の【今月のコラム】 2023年12月:コラム

「障害者週間 バリアフリーと人権教育」

私は肢体不自由特別支援学校の教員です。言語聴覚士の資格を持っているので、専門性を活かしたポジションで学校全体に関わることもあれば、担任として毎日同じ子どもたちと過ごすこともあります。担任をした子どもたちとは、卒業後も長くお付き合いが続いていて、ときどき外出を楽しんでいます。

担任は本当に楽しいです。毎日一緒にいるので、課題にアプローチする最適なタイミングや内容を選ぶことができます。言葉の課題だから国語で、ではなく、本人の興味関心に寄り添いながら柔軟に、その子に合った活動で成長発達を支援することができるのです。一番大切な目標は、学校卒業後の幸福です。

Aさんとは小学部時代の5年間を一緒に過ごしました。少人数のクラスだったこともあり、やってみたいと言ったことには、可能な限り挑戦しました。どんぐりでケーキを作ったり、てんとう虫の卵を探しに行ったり、校内宿泊では全校教職員協力のもと、肝試しをしました。楽しかったです。

視力の問題もあってAさんは、文字の読み書きが極端に苦手でした。ブローカ失語?と思うほど、言いたい言葉がなかなか出てこない様子がありました。今はそれほどではありませんが、あいさつやお礼の言葉にもつまることがあり、低学年の頃は、少し気難しい子という印象を持たれていました。今も昔も、身体を動かすことや絵を描くことが大好きで、特別支援学校卒業後は、作業所に通っています。

バリアフリーについては、小学部2年生で出会った頃から学習に取り入れていました。たとえば校外学習の際は、行く先のバリアフリー状況をパンフレットやWebサイトで調べます。小さい子にはむずかしいのではと思われるかもしれませんが。確かにAさんも最初は、ピンと来ないところがありました。けれども日常的に支援を受けることの多い肢体不自由児は、主体性や当事者意識が育ちにくいと言われます。そのため、何事も自分のこととして考えられるようにと心がけていました。

初めてJ Rを利用するときは、駅に行って切符の買い方から調べました。すると、券売機は高い位置にあり画面が光って見えないし、障害者手帳を使うので窓口で買わなければならないとわかり、「車いす用の券売機があればいいのにねえ」と残念そうにつぶやいていました。普通に券売機を使いたかったようです。それから「エレベータ小さいよ、Bちゃんの車いす大きいから乗れるかなあ」と友達を心配してくれました。「大きさは大丈夫かな、でも一人ずつ乗ると時間がかかるから、出発時間を変えた方が良さそうね」と言うと、「そうだね!」と自分の気づきが役に立ったことを、とても喜んでいました。

学年が進むにつれて、実生活に即した内容を取り入れました。たとえば車いすで電車に乗るとき、駅で支援を頼むことができます(頼まなくてもOK)。依頼を受けた駅では降車駅に連絡し、駅員さんが付き添って、乗降時にスロープを出してくれます。安全第一です。ただし、降車駅で対応する駅員さんが決まるまで待つので、時間がかかります。また、駅によって対応が異なることもしばしばです。

というわけで5年生の社会見学では、J Rの駅で「7号車に乗せてください」とお願いしました。乗車駅では1号車付近にエレベータがあるけれど、降車駅では7号車付近にエレベータがあるからです。

スマホの乗換案内アプリは、乗り換え時にどの車両に乗ればよいかを教えてくれます。便利です。しかし車いすの人には、そんな利便性よりも切実な理由があります。ホームの階段脇の通路は、狭くて人の流れが途切れるまで通れません。視線が低いので人とすれちがうときは、歩いている人のかばんが目の前をかすめたりして怖い思いをします。エレベータは高齢者やベビーカーなども使います。つまり、安全にスムーズに移動するために必要な準備なのです。

ところが駅員さんは聞いてくれませんでした。私が改めて事情を説明し、お願いしたのですが、車いす用ス

ペースのある1号車にしか乗せられません、と突っぱねるのです。たぶんその路線では、そんなことを言う障害者は初めてだったのでしょう。行きは時間もなかったので従いました。でも帰りも同じことが起こったとき、時間も人手も十分にあったので「では自分たちで行きます」と丁寧に頭を下げて、降車駅でエレベータに近い、1号車に向けて移動を始めました。すると慌てて追ってきた駅員さんが、降車駅に連絡を入れなおし、1号車にスロープを出してくれました。みんなでお礼を言いました。

「結果オーライ」ではありましたが、でも駅によっては「何号車をご希望ですか?」と聞いてくれます。合理的な理由なく断られるのは理不尽です。子どもたちには、必要な支援は求めて良いのだと伝えたいと思いました。

一緒にいたボランティアの女性が「うちの子も障害児なんです。ついすみませんって引いちゃうんです。」とおっしゃいました。必要な支援を求めているだけ、でも当事者はこんなとき遠慮しがちです。

Aさんにはどんなときも状況を丁寧に説明し、「あなたは どうしたい?」と問いかけ、選択肢を示してそのメリットとデメリットを伝え、話し合いながら経験を重ねていきました。卒業後は、電車やバスの利用にも慣れて、障害者スポーツセンターに通い、筋トレやダンス、車いすバスケットを楽しんでいます。

あるとき、外出先からビデオ通話がかかってきました。「こっちで合ってる?」と周りを映して道を聞くので、「そこ左だね」と答えました。またあるときは改札口で待っていると、知らない女性とやってきました。聞けば「エレベータの場所がわからなくなって、教えてくださいって声をかけたんだよ」とのこと。できないことやわからないことがあっても、必要な支援を求めることができれば立派な自立です。

今年、私の学校のボランティア養成講座に、講師として来てもらいました。高学年のとき、副籍交流校の先生に頼まれて、副籍校の子どもたちにバリアフリーの話をしたことがあります。そのときのスライドを元に、これまでの経験や今考えていること、自分の作業所での様子や趣味の話を加えて準備しました。原稿を音声にしてほしいと言うので、スライドに読み上げ音声をつけて渡しました。

当日まで何度も聞いて練習したそうです。そして、仕事の話は使う道具の写真があった方がわかりやすいし話しやすいから、と写真を撮って送ってくれました。いつも使っている描画アプリの紹介用に、動画を撮って送ってくれました。自分が言いたいことを伝えるために、どうしたらよいか考えたようです。

当日、ものすごく緊張していましたが、大健闘で大好評でした。終了後「言葉が出ないところや飛んじやったところもあるけど、写真や動画を作ったから伝わったよね」と笑顔で話していました。できないことはあるけど、できることはしたよ、だからまあいいよねと言う自己肯定、いいなあと思いました。

Aさんは、むずかしい話はわからないし、計算も苦手です。でも障害のある自分が、どう扱われているかに気づく力があります。好きなことがたくさんあり、やってみたいこともたくさんあります。完璧ではないけれど、自分に必要な支援がわかるし、自分がやるべきことも知っているようです。

電器屋さんでスマートウォッチを探したとき、若い店員さんが腰をかがめて、私とAさんを交互に見ながら説明してくれました。うれしそうに私を見上げるAさんと、店員さんの対応にお礼を言いました。こんなとき、そばに立っている私にだけ話す人がほとんどなのです(そんなときはいつも、「ご本人にお願いします」といいます)。でも、それをなんとも思わない、お客さんとして認められていないことに気づけない、そんな障害者もいるかもしれませんね。

電子マネーの使い方を練習したときは、コンビニのチャージ機に「高くって画面も操作するところも見えないよ、車いすの人は使えないよ」と不満そうでした。障害の無い人なら誰でも使える便利なものに、手が届かないのはおかしいと感じ、「車いすだから仕方ない」とは思わないのです。

令和6年からは、障害者差別解消法が改正され、障害者への合理的配慮が、一般事業者についても努力義務から義務へと変わります。障害のない人々が、この法律の意図するところ=合理的配慮というものを理解することが不可欠です。そして障害のある人が、自分自身を大切な存在だと思えること、合理的配慮とは何かを知ること、自分に必要な支援を上手に伝える力をつけることが、何より大切だと思います。小さいときからの教

育や、卒業後も含めた息の長い支援が必要です。担任から足かけ13年、様々な生活課題と一緒に取り組んだことは、私にとっても貴重な財産です。

ボランティア養成講座の後、送っていった駅のエレベーターが狭くて、出てくるのに少し時間がかかりました。するとAさん、そばでジリジリしながら待っていた女性に笑顔で「お待たせしました」と声をかけました。誇らしくて胸がいっぱいになりました。

2023年12月 子どもの発達支援を考えるSTの会 森岡典子

2023年11月:コラム



「あなたの夢は何ですか？」

コルカタ(カルカッタ)にて

街に到着した私を襲ったのは、まず街全体を覆う強烈な臭いだった。屋台の料理、香辛料屋の香辛料、人が行きかう道を悠々と歩く牛、犬などの動物とその糞尿、夥（おびただ）しい数の人の汗、埃……。それぞれの強烈な臭いが混ざり合った湿った空気が、私の鼻腔に突き刺さってくる。

次に視覚に強烈な風景が襲いかかる。今にも倒れそうな建物や屋台や店を背景にして、大通りには車、バス、リクシャー(三輪タクシー)、そして人々が行きかう。小さい道には、屋台から出たごみと糞尿、どこからか舞ってきた紙類が散乱し、そこに人と牛がひしめきあって、時にはぶつかり、時には絡まり、ほどけ、ゆっくりと移動する。

とどめは音である。爆音に近い音量の音楽が街を覆って鳴り響く。売店や店から大音量のラジオが流れる。それらの音は、私の耳だけではなく、胃までを震わす。

ここは世界第2位、人口13億のインドの大都市コルカタ(当時はカルカッタ)である。北米、欧州と続いた旅の最後の目的地として私が選んだのがインドであった。

「あそこで、いい思い出はない」「ゴミだらけ」「野猿や野犬に襲われた」「リクシャー代を100倍請求してきたから、頭にきてリクシャーごと川に投げ込んでやったよ」などなど。北米、欧州で出会った多くの旅慣れたバックパッカーたちが異口同音に言うことは、「インドは酷いところだ」ということである。でも、私はアジアの中でも貧しい国として有名な国、そこで暮らす人、特に子どもの生活に興味があった。だから、ここを最終目的地に選んだのだ。

子どもたちの瞳、歌

街では多くの子どもが物乞いをしている。街を歩いているとあっという間に7~8人の子どもたちに囲まれる。20人くらいの子どもの中に囲まれたこともあった。

物乞いをする子どもたちは大きく3種類に分けられる。

1.個人で物乞いをしているケース、2.親が子どもを物乞いさせているケース、3.裏に犯罪組織などの「黒幕」があり、物乞いに使われているケースである。

3つ目のケースはレンタルチルドレンと言われ、子どもたちは誘拐などによって連れてこられて一か所で寝泊まりをさせられ、日中は、街で強制的に物乞いをさせられているのだという。

物乞いだけではない。どこからか盗んできた日用品を売ってお金を稼ぐ子ども、電車の車内で歌いチップを稼ごうとする親子、道路にゴザを引いてお金を乞う子どもや身体障害者の方も大勢いる。物乞いをする身体障害者の中には、より同情を集めるために、電車のレールに足を置いて電車で足を切断したり、眼球をつぶして視覚障害者になったりした子どももいると聞いた。幼いころから本当に過酷な人生を生きている子どもも多いのである。

子どもたちは、大人のように、時には大人の代わりに働く労働者であり、大人のような生活を強いられている。ある意味、「大人」なのだ。

しかし、私が数か月のインド滞在中、接し、身振り手振りでも会話し、時には遊んだ多くの物乞いの子どもたちは、同時に、子どもらしい「子ども」でもあった。

私が食べているスナックをあげた時のうれしさいっぱい表情、空手の型の真似事をした時の驚きの表情、

盗んできたらしいボールペンを私に売りつけなくてはいけないのにいつの間にか駅のテレビ画面に釘付けになってしまう子どももいた。

自分の命を繋ぎとめるために、過酷な気候、過酷な環境、過酷な人生と対峙し、それらに適応しようとして、彼らはもがいていた。しかし、同時に彼らの心は、瞬間の小さな喜びや楽しさや驚きで揺さぶられるのだ。その姿は、まさに「子ども」そのものである。

そして、その「心が揺さぶられる瞬間」が、彼らの命を、今から未来へとすーっと伸ばして行こうとするエネルギーの源になっているように私には思えた。

子どもたちの瞳は、悲しみや辛さや疲れを宿しつつ、しかし、真剣で、力強く、澄んでいた。

「あなたの夢は何ですか？」

認定NPO沖縄アジアチャイルドサポート代表理事で、戦場カメラマンである池間哲郎さんという方がいる。彼は『あなたの夢は何ですか?』(2011既知出版社)?という著書の中で、フィリピンの異臭と毒ガスの立ち込めるゴミ捨て場、通称スモークーマウンテンで暮らす少女たちにインタビューをしている。

池間氏はある少女に質問する。「あなたの夢は何ですか？」と。

少女は答える。

「私の夢は大人になるまで生きること」

多くの家族や友だちが、幼くして、命を落としていく姿を幼い目でみつめる中で、彼女の夢は、「大きくなるまで生きること」になったのだ。

この本を読んだときに、ふっと思い出したのがインドで出会った子どもたちである。あの時出会った子どもたちは今、どうしているのだろうか。彼らが必死に繋ぎ止めていた命は、今、この瞬間もあるのだろうか？

※現在絶版のため、出版社のサイトはありません。

代わりに全国図書館検索(カーリル)サイトで紹介します。 <https://calil.jp/book/4884746961>

喜びに満ちた自分の人生を追うことができる世の中づくりを

子どもが幼くして命を失うことは、我が国でも起きている。

例えば、虐待である。厚生労働省によると、2020年度の全国215カ所の児童相談所が児童虐待相談として対応した件数は20万5029件(速報値)、前年度比で5.8%増、20年前との比較では11.5倍以上である。また、日本小児科学会によると、虐待による死亡者数は2011年には350人に及んでいるという。

彼らも自分の人生を歩むことができず、若くして尊い命を失った人たちである。

この中には多分、障害を持つ子どもたちもいるのだろう。

どんな環境にあれ、全く同じ尊さの命を持って子どもは生まれてくる。

世界中のすべての子どもの命が伸び伸びと育ち、生きる今を抱きしめ、未来を夢見ながら、ワクワクしながら自分の人生を仲間とともに歩んでほしいと私は願う。

そのために必要なのは、安全の保障、清潔な住環境、安心できる養育者との関係、健康的な生活リズム、好奇心をくすぐる物理的な環境、自然とのふれあいや運動、多様な人間関係の中での学び、喜怒哀楽をはじめとする多様な感情の経験、教育……。まだまだある。

すべての子どもたちが自分の人生を歩むために、世界中の子どもたちにこれらを保証したい。

「世界中の子どもたちに」と言うと、何だかとても遠くとても難しく感じるかもしれない。

でも「世界中の」子どもに、は難しくても、私たちは、日々接する子どもや家族を応援することはできる。

私たち(子どもに関わる)STは、子どもが成長する一番大切な時期に彼らと関わる。そして、私たちの専門はコミュニケーションである。コミュニケーションは、人が成長し、自分と周りの世界をつなぎ、そして自分らしく人生を生きていけるようになるために、この上なく重要だ。私たちSTはそのことを学び、腹の底から実感しているはずである。

だから、子どもが、周りの人たちとの間に実りあるコミュニケーションを築けるように応援することで、私たちは子どもたちが「生きる今を抱きしめ、未来を夢見ながら、ワクワクしながら自分の人生を仲間とともに歩む」ための、大いなる応援ができるのだ。

現実にはそこには様々な障壁があるだろう。

しかしそれでも「あなたの夢は何ですか?」と問われたときに、関わる子どもに「私の夢は・・・」とキラキラした目で未来を夢見て語れるようになってほしい。

そのために、私は精一杯、子どもや家族を応援する。それが今を生きる「私の」「目標」であり「夢」である。



2023年11月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員 原哲也

2023年10月:コラム



「防災について」 9月1日防災記念日に寄せて



関東大震災から100年、東日本大震災から12年、そして今年の夏は災害級の猛暑、大型台風の相次ぐ上陸等、次々災害が起きています。日本は災害列島と昔から言われていますが、岩手県に住む私が、非常に身近な事として災害を意識するようになったのは、東日本大震災から。この震災の後も、御嶽山噴火、熊本地震や豪雨による広島の上砂災害等々、ここには書ききれない位あります。このコラムをお読みいただいている皆さまも、災害を身近に感じた経験がおりになるのではないのでしょうか。

災害対策基本法第二条第二号では「災害を未然に防止し、災害が発生した場合における被害の拡大を防ぎ、及び災害の復旧を図ることをいう」と、防災が定義されています。未然に防止、被害の拡大を防ぎ、復旧を図るためには、普段の準備が欠かせない・・・と、元々防災意識が薄い私ですが、東日本大震災を経験し、そう思わずにはいられません。皆さまは、何か準備をされていますか。

私は、東日本大震災を経験した後、自家用車のガソリンが半分を切ると早めに給油するようになりました。今もその習慣は続いています。震災直後ガソリンが岩手県になかなか入って来ないため、唯一の交通手段である車に給油できず、1時間かけてJR駅まで歩く、隣の秋田県にはガソリンがあると聞き、ガソリン残量を気にしながら秋田まで給油に行くなどの大変な思いをしました。水や食料、非常用トイレなどの防災グッズの備えは勿論ですが、お住まいの地域事情に合わせた交通手段の確保も考えておくことが必要ではないかと思えます。

大昔、私が子どもの頃は、年に数回、学校等で火災想定避難訓練が行われていました。現在は、都道府県によって違いがあるかもしれませんが、回数がかなり増えています。私が関わっている保育園では、毎月1回避難訓練を火災と地震を交互に想定し行っています。(時々不審者や熊対応も設定されます。)毎月実施していると、園児たちもどのように行動するのかを覚え、先生の動きに合わせて、避難場所へ素早く移動出来るようになっていきました。支援が必要なお子さんも多くいる園ですが、急なサイレンにパニックが予想される園児には、事前に先生が付き添い、早めに外の避難場所に出て、他の園児を待つようにして対応していましたが、現在、このような配慮が無くても、他の園児と共に、避難訓練に参加し素早く避難行動を行うようになりました。避難の本番がいつ来るか分かりませんが、避難訓練の経験を繰り返し積んでいくことが、大人にも子どもにも欠かせないことを再認識しています。

また、岩手県沿岸部では、東日本大震災の津波により多くの死者が出ましたが、沿岸の釜石市鶴住居(うのすまい)地区にある小学校中学校に通う児童生徒は、全員無事でした。これは釜石の奇跡と呼ばれており、ご存じの方もいらっしゃると思います。なぜ、この地域の児童生徒が全員無事だったのかと言うと、授業の中で防災教育を年間5~10時間行い、自分で登下校時の避難計画を立て、津波の脅威を知っていた為と言われていいます。この事からも、常日頃、自分の地域で災害があった場合どう動けばよいのかを知っておく、リハーサルをしておく大切さを感じます。

災害時には、避難所生活を余儀なくされる場合もありますが、自閉症スペクトラム症の子どもや大人の中には、避難所に入れない大変深刻な状況が東日本大震災でもみられました。福祉避難所の必要性が叫ばれ、現在、各自治体で福祉避難所の設置計画が有るようです。是非、皆さまのお住まいの地域の情報を確認されておくことをお勧めします。

東日本大震災から12年経ち、岩手県の沿岸部は、インフラが非常に整備されました。高台住宅地の造成、高く長い防波堤、新しい道路・・・。ただ、人口減少は急激に進み、住宅地を作っても、そこに住む人が居ない現実もあります。震災前から人口は減少していたのですが、震災後加速しています。しかし一方で、他県からの移住やUターン等、震災をきっかけに岩手県に住み始めた人もいます。

先日、ラジオで「震災前を超えろとか、超えないではなく、今、この地域の良さを発信していくことが、この地域の未来になるのだと思う。」という言葉聞き感銘を受けました。今、ここを大事にすることが、コミュニティをゆるがないものとし、その地域に住んでいる人達のイキイキとした暮らしに繋がるのかもしれない等と思った、今年の防災記念日でした。

2023年10月 子どもの発達支援を考えるSTの会 副代表兼総務 松田輝美

2023年9月:コラム



「言語聴覚の日での取り組み」

毎年9月1日は、日本言語聴覚士協会により「言語聴覚の日」とされており、各地でイベントを開催しています。今回はその取組の1つを紹介します。

昨年度まで私は徳島県言語聴覚士会の広報部長を務めさせていただきました。STになってすぐの頃は“言語聴覚士を啓発する”ということ深く考えたことはありませんでした。地域に出ることが少なかった若手の頃は、言語聴覚士という資格が知られていて当然だと思っていましたが、地域で実際に活動するようになると「言語聴覚士の名前は聞いたことある」「あー、手話の人!」など、言語聴覚士の知名度が低いことを目の当たりにしました。

今まで言語聴覚の日に関連して取り組んだことの中で特に印象に残っているのは、小学校や高校の出前授業としてSTの職域や障害についてお話をさせていただいたことです。普段、障害のあるお子さんと関わっている私としては障害のないお子さんにどんな風にお話をしたら良いか、発達障害や支援学級のことをどう理解してもらうかなど、とても悩みました。

小学校5年生のクラスで出前授業をさせていただいたとき「障害があることは可哀想なことか?」というテーマでお子さん方に意見を求めました。大人だったら、きれいごとを言ったり、口をつぐみたくなったりするような質問ですよ。小学生のお子さんたちはとても真剣に考えてくれていました。そして大多数のお子さんは「障害があることは、可哀想だ」と話してくれました。

私がSTになったのは自分が一側性難聴になりコミュニケーションの重要性を痛感したからなのですが、小学生のお子さんたちに「私には聴覚障害があります。でもみんなと同じようにSwitchも持っているし、お金もみんなのお父さんやお母さんと同じくらい貰っているし、自分の行きたい場所に行けるし、やりたいと思ったことはやっているけど、可哀想かな?」と質問しなると、みんなは「……」と考え込みました。

私の個人的な考えにはなりますが、障害があることで不便なことや出来ないことはあります。でも、それは本人が「障害のない人と違って上手く体が機能しづらくて不便だな」と感じることであって、他者から“可哀想な人”だとは決められるべきではないとお話しました。

それから言語聴覚士がどんな人たちを対象にして、どんなお仕事をしているのか?障害のある方にはどんな職種の専門職が関わっているのか、みんなもヘルメットをかぶらずに自転車に乗っていて事故にあった拍子に頭を打ったりしたら、言葉が話せなくなったり、覚えておけなくなったり、ご飯が食べられなくなったりするんだよ……などと45分授業でなるべく障害は特別なことではないことの話をしました。

後日、小学校の担任の先生やクラスメイトの子どもたちから感想が送られてきました。先生からは「知的障害があり支援学級を使っている子のお姉ちゃんがこのクラスに居て、今まで弟のことをクラスメイトから言われたときに何も言えず黙っていたのですが、先生の授業をお聞きしてお姉ちゃんの中で何かが吹っ切れたのか堂々とするようになりました。出前授業をお願いして本当に良かったです。」という声をいただきました。また子どもたちの感想の中では「料理人になって、嚥下食を出すお店をつくりたいと思いました」など講師をさせてもらったこちらが元気を貰えるようなメッセージもいただきました。

徳島県ではまだ療育が十分でない状況もあり、言葉の遅れに悩む親御さんがSTに相談できる窓口が少ないため、STの存在がまだまだ遠いものとして感じられることもあります

私たちが地域に出て行って、STってこんなこともできるんだよ!と知ってもらうことは本当に大切なことだと思いますので、これからも地道に啓発を続けていければと考えています。



「福祉サービスにおける夏休みの活動」



日ごとに暑さが増している今日この頃、皆さまいかがお過ごしでしょうか?徳島県では、8月のお盆時期に「阿波踊り」が開催されます。そのため、この時期には、夕方ごろから各「連」※の練習をしている鐘の音や太鼓の音が多く聞こえてきます。その音を聞くと、「夏やなー」と感じます。

※ 連(れん) 阿波踊りを踊る団体(チーム)のこと。

徳島県の小さな支援施設、通称「きりん教室」が私の勤めているところです。「きりん教室」は、徳島県内に児童発達支援センター3カ所と3つの事業所(多機能型)を展開し、保育所等訪問支援事業ほか、県内6カ所の自治体との協働と3カ所の小児科と連携を行いながら、支援の必要なお子さんを地域で支える取り組みを行っています。

本稿では、夏の時期の児童発達支援や放課後デイサービスでの取り組みについて共有させていただきます。

夏の時期の季節の活動といえば『水遊び』を思い浮かぶますよね?「きりん教室」はそれぞれ規模や環境が異なりますが、園庭のある施設では、夏の『水遊び』が定番になりつつあります。ご家庭で『水遊び』を楽しむ方も多いと思いますが、児童発達支援や放課後等デイサービスで行う『水遊び』は余暇活動でもあり、指導目標を持った活動でもあります。

水遊び中に使用する水鉄砲をトコロテンの突き棒のようなタイプにすることで、両側の分離(左右の手で別々の動きができること)あるいは協応動作(左右の手が別の動きをしながらも一つの目的に向かって同時に適切な動き方をすること。片手は握り、反対側の手は押す、など)を促すことができます。また、的を水鉄砲で狙い打つ活動では、目と手の協応を促すことができます。

牛乳パックの白い部分に各自でイラストを書いて水に浮かべたり、寒天ボールに小さなフィギュアを埋め込み、取り出す作業をしたりするのも楽しいですね。

どのような活動であっても、指導目標を持って取り組むというのがきりん教室のモットーです。また、STとしてはつねに関わりの中でことばの力へ働きかけることを意識するようにしています。そのため、施設で行う『水遊び』の時には保護者にもご参加いただき、どのように遊びを展開するか、どんなグッズを使用するか、それはどんな狙い(目標)を持つてのことか等、活動内容の共有をしっかりと行うよう心がけています。

次に人気の活動は『かき氷作り』。これなら園庭がない施設でも取り組めますから、多くの施設が行っている可能性が高いですね。最近のかき氷機は、全自動のものもありますが、あえて手で回す昔ながらのタイプを使用します。左手で機械を抑え、右手でハンドルを回すことで、上記した両側の分離あるいは協応動作の促進、という目標につながるすぐれもの!

福祉サービスでの活動は、家庭や園での活動と重なることも多く、「ただ遊んでいるだけ」と思われてしまいがちですが、ST視点から指導の意図を説明し、子どもたちの遊びの中には成長のために必要な要素が沢山あるんだということをこれからも伝えていきたいと思えます。と言いつつ、施設内では個別指導と外回りが多く、なかなか『水遊び』を楽しめていない私がお届けいたしました。

2023年7月:コラム



「就学相談の現場より」

色鮮やかな紫陽花の季節がやってくると、私は「今年も就学相談の時期が来た!」と感じます。私は東京のある地域で、就学支援等検討委員会(いわゆる就学相談会)にSTの立場で7年間参加させていただきました。きっかけは、中川先生がこのサイトでご紹介くださったことでした。興味を持った私は、早速中川先生に連絡をさしあげ、教育委員会の方と面談し、就学相談の仕事に携わることになったのです。

初めて会議に参加した時のことは、よく覚えています。市役所の会議室に入ると、「木村委員」と書かれた席がありました。参加者はみな「〇〇委員」と呼ばれますが、そんな風に呼ばれたのは人生で初めてです。参加者は、教育委員会のスタッフに加えて、小児精神科のドクター、心理学科教授、学識経験者、こども家庭センター長、など偉い方たちばかり。「これは大変な場所に来てしまったぞ」と、重いプレッシャーに飲み込まれないように(溺れかけていましたが)、気合を入れて年間10回の会議に臨みました。

就学相談は、こどもの実態を把握するための材料をできるだけ沢山集めることから始まります。担当者による親子面談とこどもの所属先での行動観察、医師による意見書、各種検査、支援学級や支援学校の見学・体験、所属先から提出される資料、これらの情報が揃った後に支援を決定する会議があります。私の役割はその会議への出席でした。会議の1週間程前に対象児の資料が私に届くのですが、1回5名~40名程度と大幅な人数の変動がありました。なぜ、こんなに人数の差があるかですって? それは時期によって、申込者数が大幅に違うからです。7月は5名程度、10月頃から一気に増えて40名以上にまで膨れ上がります。

対象児の資料は、一人当たり20ページほどだったでしょうか。それが人数分あるのでとにかく分厚いのですが、担任の先生が細かく児童の状況や支援の情報を書いてくださっていたり、検査の担当者が結果の分析や支援の提案を丁寧に作成してくださったりしているので、「この子にとって、最も必要な支援とは何だろう?」と考えながら必死で読ませていただきました。

会議では、その資料を基に参加者同士で意見を交わしあうのですが、これがまた職種が違えば考えも異なりますので、時には激しい討論となることもありました。しかし、当時の議長は気さくな方で、「今回は話が進まなくて大変だったね」と笑顔でこぼされることもあり、そんな議長の一言が、緊張感の高い場所でのホッとできる瞬間でもありました。

就学相談の件数は、年々増加傾向にあります。この時期には既に申し込みを済ませて動き始めているご家庭もありますが、これからというご家庭も多いかもしれません。

「こどものできることを増やしてから就学相談をしたい」という親心も分からないではないですし、「就学先を一方的に決められてしまうんじゃないか」と不安を抱えているご家庭もあるかもしれません。ですが早めに申し込まれたほうが、じっくり考える時間ができます。もしも希望の就学先と違った提案を受けた場合、こどもの実態と照らし合わせて再度考えてみたり、ご家族や担当者と話し合ったり、時間をかけて検討することで納得して就学の日を迎えられることでしょう。残りの園生活を親子で楽しむ余裕も生まれるはずですが、しかしギリギリに申し込まれた場合、見学や体験、検査のスケジュールも過密になり、こどもの体調や園の行事で延期に...なんてしていると、アツという間に時間がなくなってしまいます。

先日、支援学校のコーディネーターに話を伺いましたが、申し込みの時期が遅れて支援学級や支援学校の見学・体験もしないまま審議になり、就学先が決定してから見学に訪れるご家庭があったり、中には見学もしないまま入学してしまうご家庭もあったりして、「思っていたのと違った」なんていうこともあるそうです。

就学相談は、こどもを振り分けるためのシステムではありません。こども一人一人が学びやすく、充実した

学校生活をおくるために必要な支援を、保護者と一緒に考える大切な機会です。担当のお子さんが就学相談の対象になりそうでしたら、ぜひ早めに声をかけてあげてください。

私はこういう仕事の機会をいただけたことで、少しですが教育現場の事情も理解できるようになりましたし、自分の視野も広がりました。その経験はSTとして大きな財産です。この先多くのSTが教育分野で更に活躍されることと思いますが、孤軍奮闘になりがちですので、『子どもSTの会』での仲間とのつながりは心強いものだと思います。



春には、元気いっぱい学校に通う子ども達の笑顔の花が、たくさん咲きますように。

2023年7月 子どもの発達支援を考えるSTの会 会員 木村寿代



「親子が安心して歯磨きを行えるために」



はじめに

「歯磨きが大変なんです」という悩みを保護者から教えて頂いたら、皆さんはどのように対応を行いますか。きっと悩む方も多いと思います。例えば今、子育て中の支援者の方はご自身のお子さんの、そして皆さんが日頃支援されている子ども達、ご家庭で安心して歯磨きが行えていますでしょうか。もしかしたら、このコラムを読まれている支援者自身のなかにも、日々の歯磨きが不快だと感じている方がいるかもしれません。歯磨きは口腔衛生にとって大切であり、毎日行うもの。子どもに関わる専門職としては、なるべく早期に「毎日の歯磨きが大変!」という親子を発見し、その悩みが解決するような専門的支援が行える方が増えてほしいと私は考えています。6月のコラムでは子ども達の口腔機能について、特に「歯磨きと口腔機能」というテーマについて一緒に考えていきます。

子どもの歯磨きの大変さは長期化するケースがある

私は現在4つの歯科医院を助産師さんと訪問しています。歯科医院に関わるようになったのは「子ども達の歯列矯正が円滑に進むようにアセスメントとケアを行ってほしい」という歯科医師の先生からの要望がキッカケでした。歯科医院では何かしらの診断がついている子もいれば、定型群の子にも多く関わります。

歯科医院に関わるようになった当初、実際にご家庭での悩みを伺っていると、「歯磨きが大変なんです!」又は「どうしても磨きにくいところがあるんです!」と保護者から相談されることが多いことに驚きました。定型群の子であっても、歯磨きに関する主訴が上がらないことの方が少ない状況です。なかには10年以上、毎日歯磨きで苦労していますという親子もいました。歯磨きが大変な子どもがいる、と私が初めて認識したのは、口腔機能に関する講義のご依頼で全国を訪問していた時、「歯磨きが小さいときからずっと不快で、できなかった」という話を受講者からして頂いた時でした。その不快感はSTとなった現在も継続しているというのを聞いて、私自身とても驚いたのを今でも覚えています。

子どもの歯磨きについては「押さえつけてでも、とにかく磨くように」と指導されることが多々あり、子育て経験のある支援者も、このような指導を受けた方は少なくないでしょう。そのような対応で上手くいくケースは良いのですが、「10年以上歯磨きに苦労し続けています」というような悩みを保護者から聞く度に、早期発見・早期対応できないものかと考えていました。

安心して歯磨きが行えるようにアセスメント力を磨こう

歯磨きに限らず、何かしら困ったときには解決策を求められるのですが、解決策を考える前に「何をアセスメントすべきか」ということを考える必要があります。どのように歯磨きを行っているかを実際に観察するなど、いくつかの視点でアセスメントする必要がありますが、今回は見逃されやすい口腔機能面に焦点をあててお話しします。

歯磨きが大変という主訴を抱える子どもの口腔機能をアセスメントする際、口腔内における12の部位に歯ブラシが楽に入るスペースがあるか、口腔内を実際に触って確認しています。例えば、歯・歯茎と頬の間に歯ブラシが楽に入るスペースがあるかどうかは最初に確認します。「歯ブラシが入る程の口唇周囲筋の柔軟性を保った状態で口を開けることができる」ということがポイントなのですが、歯磨きが大変という子どもの口腔内をアセスメントすると、開口時の口唇周囲筋の緊張がとても高く、歯・歯茎と頬の間に歯ブラシが入るスペースが乏しい(口唇周囲筋が歯・歯茎に張り付くように緊張する)ケースが少なくないことに気付きます。物理的に歯ブラシが入る空間が乏しい状態で歯磨きを行うのは親子ともに大変で、歯ブラシを持つ保護者の手も力みやすくなります。

口をあけた時に口唇周囲筋が歯茎に張り付くように緊張してしまう状態は、実は歯が生える前の赤ちゃん、そして高齢者にも観察されます。その為、どのような年齢の方に関わる場合であっても、歯磨きが安心して行

える口腔状態かどうかについては、なるべく早い段階で確認し、必要に応じて専門的なケアを行い、安心して歯磨きが行えるようにしています。

子ども達の口腔機能に関連した様々な悩みに対応できる専門職が求められています

食べること、話すこと以外にも口腔機能に関連した主訴は複数あります。歯磨きが大変ということ以外にも、例えば口が閉じられない、目の下にクマがある、赤ちゃんの泣き声がかすれている、笑顔がぎこちない(表情が乏しい)、歯ぎしり、夜間のいびき等があります。おそらくコラムを読まれている方のなかにも、機能性構音障害と口が閉じられないという主訴を両方持っているケースを担当されている方はいると思います。口が閉じられないという主訴のみの依頼もあり困っていたというお悩み相談も、山陰言語聴覚士会で今年企画して頂いた口腔機能についての講義を受講されたSTさんから教えて頂きました。また、2022年に子どもSTの会で口腔機能についての講義を担当した際も、口が閉じられない子どもが多いことや、奥舌の筋緊張が高い子どもが多く、対応に悩まれていることを教えて頂きました。これらは現代の定型群の子ども達も持つ特徴です。専門職として、口が閉じられない、歯磨きが大変、赤ちゃんの泣き声がかすれている等の悩みに対応できるようになるためには、口腔や身体の機能をより細やかにアセスメントできる必要があります。なかには「時間が解決してくれない課題」もあるため、早期発見・早期対応ができる専門職が増える必要があると考えています。私自身も早期発見のために、今年は歯科連携以外に、産婦人科や保育園との連携に向けて動いています。今回のコラムを読んで、子どもの口腔機能についてもっと勉強してみたいと思われた方は、子どもSTの会の研修企画として今年度も口腔機能についての研修が予定されていますので是非ご参加ください。

おわりに

2023年6月に開催される日本言語聴覚士学会では、子どもの発達支援を考えるSTの会として小児分野の援助職の育成をテーマにしたポスター発表、また会員による発表も多数予定されています。対面で皆さまとお会いできるのを楽しみにしております。もし、子ども達の口腔機能について、もっとお話を聞きたいという方、自分のお口でアセスメントを体験してみたいという方がいましたら、学会会場で遠慮なく声をかけてください。自分のお口が動かしやすくなる体験ができると思います。または年2回開催しています「オンライン語ろう会」で声掛けして頂いても大丈夫です。子ども達の口腔機能について一緒に楽しく学んでいきましょう。それでは6月のコラムはここまでにします。最後まで読んでいただきありがとうございました。



2023年6月 子どもの発達支援を考えるSTの会 研修委員 奥住 啓祐

「5月病っていうけれど・・・」



最初にお断りです。私は医者でも心理士でも薬剤師でもなく、特別支援学校の教員です。医学的なことや薬に関しては書ける立場ではないので、今回あくまで自分の体験等を書きたいと思います。

もし「とんでもない!」という部分がありましたら「お問合せ」等から遠慮なくご指摘いただければと思います。

さて、5月なので5月病についてというテーマをいただいたのですが、ここ数年、あまりこのことばを耳にすることは少なかったのではと思っています。背景には新型コロナの影響も強いと思いますが、5月に限らず、うつ症状に悩まされる方が増えてきたのもあるのではないかと考えています。

実は私も、もう10年ぐらい前になりますが、うつ病を患ったことがあります。その頃は仕事の量が半端なく、週に80時間以上の労働(今では考えられないのですが)。限界が来ると有休をとってまるっと1日寝込む。というような日々を過ごしていたときです。

そのうち、だんだんと朝起きられなくなって、体中の倦怠感、何もやる気が出ない症状が出始め、内科を受診して一通りの検査したのですが、どこも異常なし。神経性が疑われるとのことで、精神科を受診しました。初診の際に、ハッキリと「うつ病」です。との診断。少々驚きでした。確かに身体的なストレスはありましたが、対人関係に問題がなく、仕事が辛いとも思ってなかったため、まさか心の病とは!

お医者から、「うつ病は心の風邪だから、言うとおりの治療をすれば治るよ。時間はかかるけど」と言われたのが救いでした。

幸い、早期発見で症状が軽いうちから抗うつ薬での治療をはじめられたこともあって、2~3か月ほどで、今まで何もやる気がしなかったのがウソのようになってきました。雨が上がってスッキリ天気気分です。(私の場合はかなり回復が早いほうだとお医者も言っていました。)

ここで、世の中で多くの方が誤解しているだろう点。まず、「うつ状態」と「うつ病」とは違うという点。日本医師会企画のチラシ (<https://www.med.or.jp/dl-med/people/plaza/454.pdf>) にも「うつ、抑うつというのは病気ではなく、一時的な気分の落ち込みを指す用語」と書いてあります。一時的な気分の落ち込みは、それこそ新年度が始まって気をはっていたのが、ゴールデンウィークで一瞬気が抜けた。ということも要因となり得るわけでこれが5月病です。

うつ病よりは軽い症状が一般的なもので、時間とともに改善される場合もあるでしょう。こうなると、昔から今でもまだ言われている、うつ病をサボリ病というのは違うということ。まさに、「心の風邪」だなど実感できます。

さて、私の場合、うつ病との診断でした。治療が必要で、抗うつ薬での治療です。

ではその抗うつ薬は身体の中で何をしているのでしょうか?

丁度最近、2023年2月に出たばかりの [BLUE BACKS シリーズ](#) 「心の病」の脳科学 なぜ生じるのか、どうすれば治るのか」講談社(林(木)朗子、加藤忠史 編)の本に出逢いました。

余談ですが、BLUE BACKSシリーズと言え、難しい科学論文を割と読みやすくしてくれている科学系の新書版シリーズ。書かれている信頼度としてはかなり高いと思います。

早速手に取って読んでみると・・・残念なことに、ほとんど専門用語で内容が分かりませんでした。ノルアドレナリンがどうのとか、シナプスがどうのとか、ことばは聞いたことはあるのですが、関係性が全く不明。

それでも(すごく乱暴ではありますが)、分かる部分のみを抜き出すと、うつ病や統合失調症など、心の病気と言われているものは、基本的に脳の神経機能が異常な状態になっているために起きている病気であり、その機能が正常になれば十分に治る可能性がある。ということだと思っています。

うつ病での脳からの神経伝達物質の異常を薬で強制的に正常に戻していくというわけです。

気分的に晴れないとか、自分はダメだと思ひ込んだり、生きていても仕方がないと思ったり。という思考は、生活習慣とか性格的な部分や環境要因も否定できませんが、大部分は脳の神経機能が正常に働いていないことが原因と考えれば、見方が変わってきませんか？

少なくとも全てが自分のせいではないと思えば少しは気が楽になるように思えます。周りの人たちの対応も同じく変わってくるように思います。この本ではさらに、脳神経の異常な状態として、ASDやADHD、PTSDに付いても触れています。

以前からADHDの行動を抑えるための薬物療法は行われていますが、服薬による多動性の減少効果についても取り上げられています。後何十年後には、今は「障害」と言われているこれらのものが「病気」として治療が可能になる日も来るかも知れません。

良さそうな事ばかり書いてきましたが、最後に2つ、本の中にあったエピソードを紹介します。

まず、うつ病は治療の失敗や再発率が依然と高いこと。これは、完治するまでに長い時間が必要で、途中で治療を諦めてしまうことが多いのが主な原因のようです。また、生活習慣に起因する場合、その原因となっている習慣を改めないと再発する可能性が高まります。じっくり時間をかけての治療が大切というわけです。

もう1つは、あるADHDのお子さんたちのことば。少し引用します。

「薬を飲んでから、たしかに席を立てて怒られることは減ったけれど、座っているからといって先生のお話に興味湧くというわけではない」とか「周囲の人の動きに気付けるようになったけれど、相手が何を考えているかを考えてしまって、思っていることを言い出しにくくなった」など。

特定の機能障害改善だけではなく、本人の主観的な体験がどう変わるかという視点も持ちながら、総合的な意味でのリスク、ベネフィットを考えていく必要があることを示しています。

この子たちはまだ自分の事を表現できていますが、重度のお子さんの場合等そのことを伝えられなければQOLの向上の意味からも本当によいのか？

という問いを忘れてはいけないと感じました。そのために療育や教育は、医療と連携しながら進めていくことが大事であることを改めて実感した次第です。

一昔前と異なり、スピード感など多くのことがストレスとなりうる今の世の中、どの子どもたちも心穏やかに生き生きと過ごせる日がくることを願ってやみません。

2023年4月:コラム

「4月に思うこと 学校や子どもたちへの目に見えない見守りと支え」

ある4月、用事があって市の教育委員会に顔を出しました。教育委員を務めていた時期です。いつもミーティングに使う大きなテーブルの上に黄色いものの山。新小学1年生用の黄色い帽子と黄色いランドセルカバーでした。教育委員会事務局の方が「各校のクラスの人数分ずつに分けるんです」とのこと。

学級編制は新入生の人数が確定してから行います。ちなみに「へんせい」と打ちこんで変換される「編成」ではなく「編制」です。4月にはクラスの数、担任の配置も決定していますが、たまに、入学式の前の日に、突然の転入や転出があり、ぎりぎりの人数で編制した場合はクラスの数を変えなければならない事態になることもあるそうです。

わが市は小学校が6校の小さな市とは言え、新1年生が500人以上います。1クラス分ずつ「28人」とか「33人」とか、間違いのないように分けるのは大変な作業。「手伝いましょう」と申し出ましたが「大丈夫、私たちでできます」と言われてしまいました。仕分けが終わった帽子とランドセルカバーは入学式の前に各小学校にとどけられます。

そして迎えた入学式当日。

教育委員は市内の小学校と中学校の卒業式と入学式に参列します。「教育委員会の代表」として祝辞を読むことが任務の一つだからです。

祝辞は指導室が作成し、教育委員全員が市内のすべての学校で全く同じ文章を読みます。A4のコピー用紙に大きなフォントで印刷したものを貼り合わせて作った白い巻紙が、前日に教育委員の自宅に届けられます。ほら、来賓が壇上で和紙のケースから取り出して、おもむろに読み始めますよね、あれです、あれです。

前もって必ず声を出して読んでおきます。読めない漢字があるといけないし、これを作ってくれた指導室の方たちの顔を思い浮かべると、一文字だってまちがえてはならぬ、っていう気持ちになります。

そうそう、ある年、祝辞に出て来る有名人の名前の漢字がちがっていたから、と、夜になってから祝辞の差し替えが届けられたことがありました。

私は、一般的に式というものはなるべく短い方がいいと思っています。ただ、おとなの事情もあって、校長先生のお話のあと、市長または議会関係者、教育委員会、PTA代表など祝辞を述べる人がどうしても3人くらいはいます。

小学校用の祝辞は、やさしいことばで、短めです。それでも、教育委員の出番のころには新1年生たちは飽きてきて足をぶらぶらさせたり、きょろきょろしたりし始めます。私は内心「ごめんごめん、飽きちゃったよね」と思いながらも、転ばないように気をつけて舞台上に上がり、任務を果たします。

式が終わると、新1年生は担任の後ろにならんで教室へ。教室で配られるいろいろなものの中に黄色い帽子とランドセルカバーもあります。教育委員会事務局の人たちが、注意深く数えてダブルチェックしましたから、数が足りなくて泣いてしまう子もなかったらうと思います。

そして翌日。初めての登校日。通学路を黄色いカバーのかかった大きなランドセルを背負い、黄色い帽子をかぶった新1年生たちが登校して行きます。

以前は、それを見て「あらあら1年生、かわいいわね」としか思いませんでしたが、教育委員会職員が数を数えている現場を見て以来「1年生のみんな、市内のいろんな所でいろんなひとたちが、あなたたちのことを見守って支えているのよ。すくすく育ててね」って思うようになりました。

また、これは別の年の思い出です。

ある小学校の卒業式に参列しました。市長さんは他の学校に行かれたので、教育委員の私が来賓の先頭、校長先生のすぐ後ろにならんで体育館に向かうことになりました。

当時は特別支援教育が始まって間もないころで、その校長先生は、とても熱心に学校全体を巻き込んで新しい支援の形を作ろうと奮闘しておられた方でした。

卒業式は3月24日。校庭に桜の大きな木があり、少し咲き始めていました。校長先生は桜を見上げて「4月5日の入学式まで、桜がもってくれるといいんですが。できたら満開で」とおっしゃいました。「満開の桜の下で新入生を迎えてあげたい。たいていの校長がそう思うんじゃないでしょうか」とも。

体育館に向かって来賓の列が動き始めるまでのわずかな時間の会話でしたが、子どもたちに向ける校長先生の思いが深く印象に残りました。さいわいその年は寒い日が続いて開花の進みが遅く、4月5日も桜はまだほぼ満開に近い形で持ちこたえていました。願いがかなった校長先生は、きっと喜んでおられていたことでしょう。

教育、特に学校教育は「勉強をするところ」「知識をふやすところ」という視線で見られます。メディアでは学校のマイナス面が大きく報道されてしまう傾向も感じます。

私は、幸運にも教育委員会や学校を間近で見ることができました。

学校は、子どもたちを大切に思い、元気に育ててほしいと願う人たちの「思い」がたくさん寄せられている場所だということを知る、貴重な体験をさせてもらったと思っています。



表に出ないけれど、見守ったり支えたりしてくれている人やシステムがある。

目に見えないけれど大切なことや思いがたくさんある。

それに気づき、みんなで子どもたちを育てて行かなければ。

4月は私にそんなことを思い出させてくれる季節です。



2023年4月 子どもの発達支援を考えるSTの会 代表 中川信子

「STのきょうだい児」

皆様初めまして、今年度より運営委員にSNS担当として加えていただきました。現在は福岡県の病院でSTをさせていただいています。パンデミックになってからこの会に入会したため皆様とは直接会うことは叶わず、画面から運営委員の皆様の末席にいらしていただいている心情です。ST歴は4年目となります。自分のきょうだい児としての経験の話を踏まえ自己紹介をさせていただきます。

自分がSTになった理由は、弟に自閉症と重度知的障害があるからです。周囲の皆様はこの理由を話すと「弟のこと思っていて偉いねー」「やさしいお兄ちゃんだね」と言っていただけますが、時々自分はこの受け答えに違和感を覚えることがあります。

実は自分は『障害のある弟が好きではなかった』のです。登校班では周囲の注目を浴びる行動を取ったりショッピングモールで騒いで人目を集めたり、両親が弟のことで揉めることがあったりなど、弟のことを嫌いだと思っていた時期もありました。

このように書いてしまうと「セラピストでしょ!?!」「血のつながった弟でしょう?」とすごく誤解や不安を与えてしまうかもしれません。しかし自分も1人の人間で、兄弟だからこそうましくないこともあると感じています。

職場や養成校で同じような境遇の方と、このような深い背景を話合う機会をいただいたときに聞こえてくる内容は、必ず肯定的な意見です。「すごく兄のことが好きで」「弟がいてくれたから」などです。きょうだいを好きなことはとても素敵だと思いますし、そういった関係になれたことは幸せだと思います。しかし、場によってはきょうだいのことを苦手であったという経験が言いにくくなっていることはありませんか?

個人的には、きょうだいのことを『苦手だ』と言う方がいて当然だと思っています。自分はその気持ちに大きく共感したいですし、苦手なあなたが悪いんじゃないんだよと伝えたいです。

高校生で進路について考えた時に、ST以外の道も選択できたのですが、当時は“きょうだいの関係にケリをつけてやる。逃げ続けちゃいかん”と思い、STを目指して受験しました。今では、上記の「弟のこと思っていて偉いねー」「やさしいお兄ちゃんだね」といった、違和感のあった言葉を受け入れることができるようになってきていると思いますし、もちろん弟がいることで恩恵をもらっている部分も感じることができます。相手との信頼づくりにおいて、自分と似たような立場の方は、自分の声に耳を傾けてくださる方が多いです。

経験をしっかり受け入れることが難しい時もありましたが今は、つながりを感じつつもきょうだいそれぞれが一個人として生きていたい、そう思えるようになってきました。

長々と書いてきましたが、きょうだい児の方がいろいろなことに囚われず、心を自由に持っていてほしいと願います。

最後に当会のSNSの宣伝をさせて下さい。

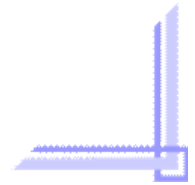
Twitter・Facebook・Instagramの公式アカウントのフォローのほど、よろしくお願いいたします。

◆Twitter : <https://twitter.com/kodomoST2022>

◆Facebook : <https://www.facebook.com/kodomoST2022>

◆Instagram : <https://www.instagram.com/kodomoST2022/>

アカウント名はいずれも【 kodomoST2022 】です。



2023年3月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員

2023年2月:コラム

カイロより冷えピタ持参の受験生??



一年で最も寒い時期に突入しましたが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。子どもの発達支援を考えるSTの会で研修委員をさせていただいております福永と申します。平日は福岡県の大学でST育成、平日の夜と休日は主夫として家族に仕えております。

さて、1月~2月という真冬のこの時期、勤務先の大学では国家試験指導の最盛期を迎えます。学生さんに対する個別指導を毎日繰り返し、知識の習得を図ったり、心理的なフォローを行ったり。同時に、1年生から4年生までの体調管理も徹底して行っております。登校前の体調報告とそのチェックをし、全学生のその日の登校の可否を厳しく判断します。受験生の輪の中に新型コロナウイルスやインフルエンザウイルスが持ち込まれないように、厳重に注意を払っているのです。今年も成人式に参加した学年でコロナ陽性者やインフルエンザの罹患者が目立っています。最終学年である受験生の頑張りが水の泡にならないように、年に一度のビッグイベントに向けて最大限の感染対策に学科をあげて取り組みます。

年に一度の大事な国家試験受験に関してですが、厚労省はコロナ陽性である受験生の受験を認めておりません。また、試験会場入り口でのカメラによる検温で37.5度以上の場合は抗原検査キットによる検査を実施し、受験可否を決定するという方針も打ち出しています。試験当日に会場まで行けたのに門前払いをされる受験生が発生するわけです。当日の試験会場内でコロナ感染を未然に防ぐという心意気は理解できますが、先日実施された大学共通試験とは異なり、国家試験では受験生への救済措置がありません。「国家試験の追試験は実施しない」というニュース。3年前は大きく取り上げられましたが、最近では全く聞かれなくなっています。

今年度も早い段階から、医療や福祉の関係団体が国へ追試の実施を何度も求めていたのですが、国からの回答は、コロナ陽性者で未受験となった場合は受験料を返金するとの措置が新たに追加されるということのみで、追試験未実施の方針に変更はみられませんでした。そのブレない態度の根拠には、従来から心身の不調を理由とした追試は実施していない事であったり、同程度の問題を作成する期間がなかったりなどの理由を述べられているようですが・・・私には到底理解できません。

現在、感染対策を徹底してもコロナに罹患する人が多くいらっしゃいます。実は4日前に5歳の次男から長男と長女へ、その後私もコロナに感染しました。職場復帰までは後2日の自宅療養ができますが、本当に戻れるのか心配なくらい現在も体調は良くありません。後遺症のことも心配です。テレビやインターネットニュースでは、感染しても無症状であったり軽症であったりなど、コロナウイルスを軽視するようなコメントを見聞きするようになりましたが、一方で、死亡した方の情報や私たちのように重い症状が出てしまう方々がいることの報道はあまり詳しく取り上げなくなつたように感じます。

第8波がピークを迎えて感染者数が減少傾向にあるという報道がある一方で、感染者の実数にカウントされていない「隠れ感染者」の存在が気になっていたのですが、そこにきて、新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けを「5類」に引き下げるとの総理の表明です。この表明によって、人々のコロナへの警戒が緩み、感染リスクがなお一層高まるのではないかと心配しています。STを目指して努力を続けている受験生が罹患すれば、数日間は勉強できない状態に陥ると思います。いま罹患することで十分な追い込みをかけられなくなる場合もあります。未だにインフルエンザのような特効薬はありませんし、後遺症対策も十分でないのに、軽視するのはいかがなものかと思えてなりません。

言語聴覚士の国家試験において追試験を設けられないことや、世の中のコロナウイルスに対する警戒が薄れ

ることによって、受験生が抱えるプレッシャーはコロナ前とは比べものにならないくらいに増大しています。現在は、努力だけで感染を回避することは不可能です。2月18日の国家試験会場に入るまで、受験生も私たちも感染対策を講じながら、入り口の検温カメラの数値が37.4度以下を示すことを祈るしかありません。「あ!カイロを持たせずに冷えピタを持たせたらいいかも・・・」。試験会場に入ることがある意味奇跡のようなものです。

少しでも多くの後輩言語聴覚士が誕生できるように、2月18日は皆さんもご声援をお願いいたします。

2023年2月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員 福永陽平

2023年1月:コラム

「新運営委員の感想」



皆さま、新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

今年はどんな一年になるのでしょうか。また、どんな一年にしていきたいのでしょうか。私はちょうど1年ほど前に、そろそろ子どもSTの会の運営委員やってみようかなあと思い、こうして今コラムを書いているところです。

私が運営委員になりたいと思った理由はいくつかありますが、最大の理由は、運営委員の皆さんが楽しそうということ！皆さんの顔がイキイキしていて、そんな方達が集まっているからこそ、いつも良い会が継続されているのだと思います。自発的に挙手して何かに取り組むことってすごく素敵なことですよね。

この間、臨床現場でも自発性は大事だなと思うことがありました。その男の子は年長さんで、そろそろ平仮名が読めるようになってほしいと思い、支援目標にも掲げ、毎回STのセッションでは平仮名の読み練習を行っていました。しかし、どうもうまくいっている感じがせず、本人も楽しくなさそう。これはちょっと方針転換したほうがいいのか、と思い始めていた頃。STのセッションを行うためにその子を呼ぶと...「お勉強は!!小学生になってから!!する————!!!!」と派手に拒否。ごもっともだと思い、一人大反省会。その後いろいろな葛藤の中、結局ゲーム感覚で遊ぶ中に平仮名を織り交せていたのですが、ある日、またその子が叫び始めました。「早く勉強したい！お勉強の部屋行こう！」今度はどうした?!と思いつつ、さっそくセッションを実施。なぜか急に平仮名が読めるようになっていて、いつもよりも200%増しで落ち着いて課題に取り組んでいる。終わってから保護者にお話を伺うと、保育所で女の子にお手紙をもらって、その返事を書きたくて勝手に覚えたとのこと。その動機は何よりも代えがたい...負けたわ...と思ったのでした。

つまり、本人がやりたいと思えるようなことを提案できているか、ということは基本中の基本。楽しく、やりたいと思わないことには何も身に付かないのだなと改めて教えられました。目標を掲げていると特に焦りも出てきます。私の勤め先は児童発達支援の事業所なので、就学と同時に子どもたちは卒業してしまうため、余計に残りの期間でなんとかしないと!という気持ちでいっぱいになってしまいます。でも、何事にも適切なタイミング、適切なペースがあるのだと思います。別に周りとは絶対一緒のペースでないといけないということはないし、その子にとって最適なタイミングを見つけることも私たちの仕事なのかなと思いました。

さて、運営委員になって実際どうだったのか。

今までよりももっと身近に子どもSTの会を感じることができています。無理のない範囲で今年もお手伝いできればと思っております。もし、皆さんの中で「今がそのタイミングかな?」と感じられた方がいらっしゃれば、お仲間になりませんか？

2023年1月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員